

Title	後期Wittgensteinの「理解」概念について
Author(s)	奥, 雅博
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1976, 2, p. 27-41
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8641
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

後期 Wittgenstein の「理解」概念について

奥 雅 博

後期 Wittgenstein の「理解」概念について

I

Wittgensteinを気の利いた小道具としてその都度借用するのならともかく、彼を正面から取り上げようとするのであれば、問わねばならない一つの大問題がある。彼の主著『哲学探究 (Philosophische Untersuchungen—以下PU)』は、何を巡り又何のために書かれたのか、そしてこの書をどのように判定し自らの立場をどのように決するか²⁾、である。

筆者の見るところでは、『哲学探究』は、彼が自らの初期思想に見出した誤謬を克服しようとした苦闘の足跡である。もとより1918年に脱稿した『論理哲学論考 Tractatus Logico-Philosophicus』によって「問題は本質的な点では究極的に解決された」(序文)と考えて一時哲学を放棄した彼が、1929年に再びケンブリッジに戻った時に、初期思想の重大な誤謬に気付いていたとは言い難い。しかし1945年に第一部が完成した『哲学探究』はその序文で、

「私が十六年前に再び哲学に従事しはじめて以来、あの初めての書物に私が書き記したことの中に、重大な誤謬を認めざるを得なかった」「私の新たな思想は、私の以前の思考方法との対比によってのみ、私の以前の思考方法の背景の下でのみ、正しい照明を得ることができるであろう」

と述べているのである。

彼が克服すべきであるとした誤謬は何であったか。一口で言えば「言語の意味に関する指示理論」である。ドイツ語の *Bedeutung* の英訳として *reference* を連想してはばかるところのないような言語理解を標準とする立場である³⁾。この立場の下で、言語表現はそれが用いられる具体的脈絡から分離されて命題という形に整えられる。命題は事態に対応させられ、語はもの、事件、性質、状態、動作、等々を指示するとされる。そして命題の総計としての言語が世界と関係づけられる。『論理哲学論考』のよって立つ言語観は、概略このようなものであった。

いうまでもなく、この言語観にしても根拠がない訳ではない。むしろ反対に今日ではこの言語観こそが唯一正統のものときえ思われるほどである⁴⁾。仮に我々が「コップとは何か」と問われて「これがコップさ」とコップを指示して答え、更に「『この部屋には大勢の人がいる』という文は何を述べているか」との間に対して「大勢の人がいるという事実」と答えるとすれば、我々は既にこの言語観の発想の枠の中に捕えられている。Wittgenstein 自身こ

の発想が作り出す陥穽を避ける努力を至るところで払わねばならなかった。『哲学探究』は「長い錯綜した旅路の途上で生じた風景のスケッチの集積」であり「アルバム」(PU 序文)であるが、この問題に対する彼の努力のにじみ出た想定問答集とも解されるのである。

彼の努力はどの方向になされたか。上述の問に対して彼ならどのように答えるであろうか。あの種の問が日常生活のどの場面で実際に問われるのか、そしてその場面で一体どのように答えられるのか、と反問することであった⁴⁾。反問により上述の問が誘導尋問に他ならないことを看破し、誘惑の魅力を減少させ消滅させることであった⁵⁾。そこで彼は意味の指示理論を念頭におき、このように考えるならば、「考える」という語の意味を知るには、思考する折に自分に何が生じているかをよく観察すればよい、そこに見出されたものが「思考」ということになる、とか、「ゲームセット」とは何かを知るには、ゲームの最後の瞬間に注視すればよいことになる、といった具合に皮肉な批評を施すのである。(vgl. PU I-316) いうまでもなく、これらの概念はこのように用いられてはいない。従って、我々はこれらの概念がいかに用いられるかを問わねばならない。そしてこれを標語として述べると「語の意味とは、言語の中でのその使用である」(PU I-43)となるのである。

しかしこの立場を「意味の用法理論」として一般化するとすれば直ちに多くの問題が生じてくる⁶⁾。筆者自身、自らに可能な最良のことをなすうる幸甚をえた場合、Wittgenstein の忠実な同伴者に留まるか、或いは彼の理解者かつ批判者と化すか、現在のところ定かではない。仮に後者の途を歩むとすればその「理解」も Wittgenstein 当人には或いは体系的誤解と映るかもしれない。しかしながらいずれにせよ小論では、指示理論と用法理論との間を徒らに往来することなく、彼と共に歩みつつ「錯綜したアルバム」の一部を整理してみたい。即ち、理解をめぐる問題、「理解する」「知る」「わかる」「できる」「会得する」等々の語をめぐる問題の部分(主としてPU I-138~197)についての整理である⁷⁾。

II

「理解する」「知る」「わかる」「できる」「会得する」—これらの語は我々によく知られている。これらの語を用いて我々は話をするし、また文章を書く。やや重々しい響きのある「了解」という類語にしても、日常語として無線の交信等で用いられている。

他方、理解、という事柄もごく日常茶飯事である。我々が言葉を話し、聞き、文章を読み書きする折に、ある能力の範囲内という限定づきではあるが(例えば外国語はなかなか聞きとれない、文科系の書物なら全く問題ないが数式が出てくるとどうもいけない、といった)、理解しながら、そうしているからである。更に、次のような「理解」の例(PUI-151f.)

も目新しいものではない(知能検査のバリエーション)。即ち、Aが黒板に数列を書いているとき、Bはそれを見ている、1, 5, 11, 19, 29, まで書かれた時、Bに突然ぱっと閃きが生じ、Bは「わかった」と叫ぶ、そしてAに代って数列を正しく書き続けていく、という例である。つまり、その時Bは数列を理解したのである。

以上のように理解とはある意味では既によく知られたことであるが、これについて以下のような特徴が問題点として指摘できるであろう。

① 我々は全ての存在者について「それが理解する」とは語らない。「それが理解する」と言われるのは、意識、心、精神(この三者の異同については括弧に入れることとして)等を持つ存在者のみである。

② 「理解」には時が指定できる。即ち、聞いている時に理解しており、閃きが生じた時に数列を理解するに至ったのであり、理解しているので数列を正しく記せるのである。

③ しかし時の指定については特殊事情がある。「私はこの十年来ドイツ語がわかる」と語ったところ、「その間、間断なしにかー例えば歯の痛みのように」と問われるならば、我々は問そのものに当惑するであろう。又、一旦理解した事柄を忘れることはよくあるが、「忘れているのにいつ気付いたか」との問には答えられるが、「いつ忘れたのか」との問は、問自身に不適切さが感じられる⁸⁾。(vgl. PUI-181f.)

④ 具体的事例では、どこから理解がはじまったか識別し難いものが数多くある。例えば子供に平仮名を教える場合がそうである。初めに子供はあてずっぽうに答え、ほとんどまちがうが、次第にできるようになる、できるようになるが時々間違える、そして遂には滅多に間違えなくなる。しかし、どの時点で子供が理解するに至ったのか。まぐれ当りの連続と時折の誤りとの間に境界線が引けるであろうか。(vgl. PU I-156f.)

ところでこれらの問題に対する次のような解決法こそ Wittgenstein が強く批判したものであった。即ち、理解の主体は意識であり、理解とは時点ないし期間の指定できる出来事・状態である、そして「理解」という語は意識の或る出来事・状態の名である、と考え、従って理解している、理解する、とは何かを知るには、この折に意識に何が生じているか、意識がどうなっているかをよく調べればよい、という解決法である。いう迄もなく「意味の指示理論」に依拠した発想である。

この発想にはほぼ二通りのいき方がある。一つは理解に特有な精神現象を発見しようとするものである。他の一つは理解をメカニズムと関連させて、ある種のメカニズムの形成・保持として理解を考察しようとするものである。Wittgenstein からみれば、両者のいずれも理解という概念をめぐる問題に真の解決を与えるものではなかった。この点を以下考えてみたい。

III

第一の立場、即ち理解に特有な精神現象を発見しようとする立場は、次のように主張できるであろう。先程の数列の例で「わかった」と君が言う時、君は理解したからこそ「わかった」と言った訳だ、さもなければ君は無責任に「わかった」と言ったことになる、君が理解したか否かを君が知らないはずがない、理解とは君に生じた何事かである、さあこれが何であるかを調べてみよう、ここで発見され、確定されるものが「この数列の理解」なのだ、という訳である。平仮名を学ぶ子供にしても同様、この etwas が生じた時子供は理解したのであり、只その折に「理解した」と発言するようにしつけられていないので子供は黙っているにすぎないのだ、という訳である。

しかしこの etwas を見出すのは決して容易ではない。例えば我々が無意味な音としてではなく言葉として理解しつつ語や文を聞く折に、一体何が生じているであろうか⁹⁾。

理解する時、心の中に観念・像・イメージが生じているのだ、という形の解答がある。しかし「心の中に観念が生じる」との発言は事実報告としては私には明晰ではない。これが、「理解しながら語や文を聞く」ということの文学的表現であれば、これは言いかえにすぎず説明ではない。他方、像やイメージについては次の意味でなら理解できる。即ち、「さいころ」と言われてその形を思い浮かべることができ、又「パーティーはアルコールは底をついたものの食べ物結構あった」と言う時、昨夜の八時頃の情景が浮ぶ、という意味で。しかしこのイメージ説にはいくつかの難点が存在する。

第一に、イメージは理解の内容を決定しうるほど強力かつ豊富ではない。「緑色」と聞き緑色のイメージが浮ぶ場合そのイメージは緑の純色か清色か濁色かのいずれかである。仮に緑の純色であったとする。その場合そのイメージは何故緑色のイメージであって、緑の純色のイメージでも純色一般のそれでもないのか、という問が生じる (vgl. PU I-73f.)。つまりイメージから出発したのでは、緑を理解したのか緑の純色を理解したのかが決定できないのである。ここでイメージの増員を図るならば、言葉と同じ数だけ存在するが説明力を持たない上述の観念の場合に帰着するであろう。

第二に、否定に関しての問題がある。「私は昨夜夢を見なかった」と私が話す場合、私は見なかった夢を定立し次いでそれを否定している訳ではない。この点をイメージ説がいかに説明するか、という問題である。

第三に、比喩的表現としてではなく事実として考えるならば、我々が話をする折にまず大抵は心中にイメージなど生じることなく言葉は流暢に流れていく。イメージが生じるのがむしろ例外であって、特に印象深い場合、よく注意を向けた場合、初めて何かを学んだ場合、

等々の何らかの理由が見出されるのである。

もとより、このように主張したからといって、あることを理解する折に意識に何事も生じていない、と主張しているのではない。むしろ逆であって実に種々のことが生じうる。上述の数列を理解する時、Bの心中に何が生じるかについては、種々のことが考えられる。例えば、Bは種々の公式を次々と思いつけてテストしていく、第4項まで記された時に $a_n = n^2 + n - 1$ が思いつかれる、そして第5項の29がびたりと一致する、それで「わかった」と言う。或いはぼんやりととりとめのないことをいろいろ考えているがふと、公差はどうなっているか、と思う、そして「わかった」と言う。(recursive に表記すればこの数列が $a_1 = 1: a_n = a_{n-1} + 2n (n \geq 2)$ であることに気付いた訳である。) 更には彼が数列マニアであったとすれば(平均的人間が数列1,3,5,7,9,...に抱くような)「なんだ、実にやさしいじゃないか」という感を抱き、「わかった」と言うかもしれない。(vgl. PU I-151) 問題は、これら全てに共通なのは「わかった」と言う発言と、それに続けて正しく数列を書くことだけであって、その存在ゆえにそれら全てを「理解」と称させる共通な etwas など存在しない、ということである。いわば頭の暗闇に電灯がともるような共通な経験など存在しないのである。

だが果して、理解に共通な etwas は全く存在しないであろうか。例えば人間が何かを理解した時、更には実験動物が何かを学習した時に、共通な生理現象が見出されることはありえないであろうか。無論この可能性はあらかじめ否定されえない。しかし見出された現象が「理解」に対応しており「緊張からの解放」に対応してはいないということは、はたして確実であろうか、等多くの吟味が残されることであろう¹⁰⁾。

あるいはイメージが常に生じているのではない、との先程の主張に次のように反論されるかもしれない。即ち、理解の折には特有の意識現象が生じている、ただし最初は意識されていたものが、通常は習慣という堆積物の下に隠されてあたかも無意識の如くにある、しかし注意の集中で掘り起すならば意識の表面に浮び上がってくるのだ、と。なるほど種々の模様をみて音を自由に連想すると、母国語の文字を読むことは同じではない。しかしこの相違を etwas の有無とみなし、注意力の集中によって etwas を見定めようとするのは的外れである。(vgl. I PU-170) ここで見出されるのは、通常理解しながら文を読む折に生じていることではない。注意力を集中した時に見出したと思われるもの、にすぎないのである。(vgl. PU I-413)

IV

第二の立場は、理解をメカニズムと関連させて考える立場である。例えば、理解しつつ聞くとは外部からの音を内部に登録するメカニズムが作動しているとのことであり、理解しつつ話すとは外部へのメッセージを送り出す装置が作動中とのことであり、平仮名が理解できるようになった、とは平仮名の自動読取装置の配線の完了であり、数列がわかった、とは数列を展開する装置の完成である。

この立場を支持する最大の理由は次のことであろう。即ち、数列の展開の例でいえば、正しく数列を書き続けることは理解の結果、証拠、現象形態にすぎず理解そのものではない、これらのことを可能にするものが理解でありメカニズムがそれに他ならない、という考えである。(vgl. PU I-146,152)

更にこの立場からはいくつかの難問が片付けられる。先程の「イメージは絶えず意識されているか否か」という問は、理解をメカニズムの形成・保持と考え、意識にのぼる事柄をメカニズムの随伴現象とみなすことによって解消される。Ⅱの問題点③(「十年間絶えずドイツ語を理解していたか」「いつ忘れたのか」)に対しては、メカニズムが維持され続けていればその間絶えず理解していたのであり、メカニズムに変化が生じた時点で忘れたのだ、と答えられる。(vgl. PU I-149)

ここで新たな話し方が導入された訳であるが、「絶えず」という語を現在のような形で Disposition に対して導入することは、一般的には奇異なことである。例えば「眼前の角砂糖が水溶性という性質を絶えず持ち続けている」と語るのはグロテスクであり、「子供が水に落ちたら自分も続いて飛びこもう」と無意識にせよ絶えず考えているのはこっけいであり、又このような仕方では他人に「万一の時は立派な葬式を出してあげます」と言われるのは不気味ですらある。しかるにここでの理解の例に関しては、メカニズムというパラダイムに依拠しているが故に、我々はそれほど奇妙に感じない。即ち、動力を与えれば動く機械が表象され、そして機械の機械性(メカニズム)、即ち設計図と仕様書の核心は、我々の見通しの利くものであり、このような機械は運動の可能性を現在自己の内に含んでいる、と我々は考えがちだからである。(vgl. PU I-193f.)

上述の種々の装置はおそらく作成可能であるし、自動読取機などは既に実用化されている。我々は耳にした文章を、ある限界内ではあるが、聞いた通りに復唱できる。従ってある長さの文が一定期間心に留まっていることを、外に取り出して確かめる装置は作成可能であろう。又、話され書かれようとする内容を発声器官や手指よりもより神経中枢に近い場所から取り出す装置も可能であろう。しかし我々の問題はメカニズムに基いて理解を説明することにあつたのであり、文章をもう一つ複製する生体と直結した装置の作成や、ここで得ら

れたモデルの種々の工学的応用を考えることではなかったのである。

例えば平仮名の読みについても我々の問題は自動読取機の作成ではない。我々はテキストを真に読んでいる子供と、テキストを見ながら既に覚えた文を暗誦しているにすぎない子供を区別しうるし、又区別せねばならない。即ち、眼球運動と発声の単なる並存と、眼球運動が発声をもたらすこととを、人間において区別せねばならないのである。

更に先程の数列の例についていえば、理解の折に完成した数列の展開を可能とする装置は先の二つの公式 ($a_n = n^2 + n - 1$, と $a_1 = 1 : a_n = a_{n-1} + 2n (n \geq 2)$) のいずれに基いて形成されているのか。当人の理解の仕方に応じてメカニズムも種々である、とされるならば、メカニズムに基いて理解を説明しようとした意図が崩れてしまうであろう。我々は異った意識状態に対して異ったメカニズムを想定するにすぎないことになるからである。他方、メカニズムは一通りである、と答えられるなら、何故複数の随伴的な意識現象が生じるのかが明らかにされねばならない¹⁴⁾。

あるいはここで次のように反論されるかもしれない。理解とはメカニズムの形成・保持そのものに他ならない、従ってメカニズムに基く「説明」云々ではなく、メカニズムが呈示されれば十分なのだ、只現在は科学が未発達のために呈示できないだけなのだ、と。

この種の雄大な反論に対しては稿を改めて論じる他はないが、今は三点ほど指摘しておくことにする。第一は、機械的因果的な発想法の普遍妥当性の問題である。つまり、ある出来事を考える折に、当の出来事が生じるための十分条件を考え、この十分条件が満足されればその出来事は当然生ぜねばならぬ、と考える発想の問題である。そしてこの十分条件と出来事の対応(因果律)を規範とし、現実とのずれは一部の条件の欠除、攪乱要因の介入、として理解していこうという態度である。この態度の普遍妥当性が問われねばならない。

第二に、理解とは何か、との問は、成否を将来に委ねた仮説によって答えられるべき問ではなく、ある意味では現在答えられねばならない問である。例を数学にとろう。ここ百年の歴史しかない数学基礎論以前にも既に高度の数学が存在したし、生活の中で数学は立派に用いられていた。その限り人々は数とは何であるかを知っていたし、今日でも多くの人々は基礎論での数の規定を知らなくても、数とは何であるかを承知しているのである。むしろ数学基礎論の数の規定が正しいものとして受け容れられるのも、それが我々の既に承知している数をよりよく説明するからに他ならない。理解についても同様のことが言えるのである。

第三に、将来の科学の進歩に期待をかけるにしても、例えば生理学的な個人差が大きく、個々人のメカニズムの具体的な配線図はそれぞれ各人の報告を頼りとして描かねばならないという可能性をあらかじめ否定しえない。(vgl. PU I-158) メカニズムを把握すれば十分であって、意識報告はあってもなくても構わない随伴現象である、とは限らない。我々が知ろうとしていることがとりわけ「意識」を持つ存在者にのみ特有な「理解」であるからには、

「意識報告」にあたる部分ぬきで済ませるか否かは問題なのである。

もとよりこれらの点については反対の立場から種々の論を立てることができる。だがこれ迄、メカニズムの立場から何が得られたか。既に知っていることの新たな語り方のみである。即ち、「メカニズムに問題がなければこの十年間絶えずドイツ語を会得し続けていた。ただしメカニズムについてはよく知らない」という語り方である。

V

だがしかし理解とはある種の精神現象であることを否定し、他方メカニズムの形成・保持として理解を解釈することをも斥けるからには、我々にはなおどのような途が残されているであろうか。極端な行動主義・唯名論しか残されていないのではないか。

行動主義も唯名論も Wittgenstein の採るところではなかった。彼によれば (PU I-308), 行動主義は意識内在論に対する利口な批判者にすぎない。そのやり口は、精神的な出来事・状態をその存在論的性格を一まず括弧に入れて定立させ、次にそのようなかわい出来事・状態の否認に追い込むことにある。又、唯名論に対する彼の評価 (PU I-383) は、唯名論は実念論が無造作に仮定する種々の実体を疑問に付した点で正しいが、全ての語を名と解し、語の使用について表面的な説明しか与えなかったのが彼等の弱点であった、というものである。先程の二つの立場と同じく、行動主義も唯名論も「意味の指示理論」の地平で動く限り、問題は依然として残されたままなのである。とすれば、理解について問うには、理解を何らかの出来事・状態と直ちに解することなく、「理解」という語が我々の生活の中でいかに用いられているか、「理解」という語を言語の中を含むことによって我々の生活形式はどのようになっているか、を問わねばならない。

既に述べたように、「理解する」「知る」「わかる」「できる」等々の語を我々が正しく用い、更には子供や外国人にこれらの語を教えることができる限り、理解とは何であるかは我々に知られている。他方、これらの語は我々の生活に深く入りこんでいるだけに、その用法も複雑を極めている。ここでは「理解」に関する完璧な一覧図を与える代りに若干の問題点を指摘することで満足せねばならない。

① 理解する、とは態度の変容が可能な、意識を持つ存在者についていわれるが、ここでの問題は、我々の言語が「理解」その他の語彙を含むことがどれだけの効果を持つのか、ということである。いうまでもなく、これらの語が我々の辞書にあるか否かは、植物の名が四つ五つ多いか少ないか、とは比べものにならない重要な問題である。やや古めかしい表現を用いるならば、「理解」等の語の成立(導入)と、訓練・学習・課題達成等が自覚されたプロセ

スとして確立することとは、等根源的である、と考えられる。「理解する」等の語は、能力に対する評価語、判別語である。ひいては判別の根拠を述べそれについて論じあうということも、更には「理解」と同定しうる何らかの事象の追求までもがこれと共に生じてくるのである。又、理解・無理解の境界が必ずしも明瞭でないこと(Ⅱの④)も、一つは可能性一般に関係する問題に、また一つは我々が達成目標をどこに設定するかという点に、依存しているのである。

② 他方自分について「わかった」と発言する多くの場合、この発言は私の状況報告(メカニズムが内部で完成した、ある特有の経験をした)ではない。むしろ私の態度決定、行為、一つの責任をとること、である。数列の例での Wittgenstein の表現 (PU I-180) を用いれば、「今わかった」との発言は「シグナル」であり、シグナルが正しく用いられたか否かはそれ以後の出来栄で判断される。日常のやりとりの「わかったかい—わかっている」「知ってるかい—知っている」「もうわかった、わかった」—、これらは話を先に進めるか、又は場面を転換する合図である。又、「本人がわかったかわからないかわからぬはずがない、一体どっちなんだ」と教師に問い詰められて行なう返答も、一つの態度決定である。

③ 先の数列の例で、「わかった」と言い、そして続けて数列を書こうとしたところ書けなかったとすればどうであろうか。理解したと誤って思ったのか、それとも一旦理解したがすぐ忘れたのか。いつでもすぐ忘れる人がいたらどうであろうか。この間は見かけほど簡単ではなく、また意識の確信やメカニズムを基準に答えられるものでもない。「すみません」「間違いでした」「たしかできたのです」等々数多くの答のケースが考えられる。しかしいずれの発言にしてもそれが尤もと認められるか否かは、当の状況と、場合によっては更になされるべき弁明とに依存している。このような場合、状況報告と態度決定との境界は融解しているのである。

④ 「理解」という語も、「犬が主人を理解する」からはじまり「哲学とは何かを真に理解する」まで、実に種々の場面で用いられる。又、同一のことについても「一層よく理解する」と言う。そしてこの「理解」も、それが用いられる全場面に共通なものを指摘することはできず、例の「家族的類似性」(PU I-66f.)を作っているのである。

我々はここで「理解」の全てを尽すことはもとより意図していない。しかしこれ迄の扱いはある偏りがある、と批判されるかもしれない。即ち、今迄の議論は読取機や知能テスト等々のいわば「低次元の」事柄に熱中している、しかし「理解」について我々が語るのに最もふさわしい場面は、他人の言葉の意味を理解するところである、それもさしづめ反応等を顧慮することなく内的享受を専らとするような詩の理解などがそうである、と。

しかし詩の理解にしても我々は言語共同体の中で学んだのであり、又詩が理解されたか否かもある範囲内でテストされうるのである。即ち、詩を読んで、絵を描く、感想文を書く、更には贈歌に対して返歌をする、これらはいずれも詩の理解に他ならない。そしてこのよう

なことを行いうる人についてのみ、彼が特にその場で反応を示さずとも、我々は「彼は詩を理解する」というのである。

ところで平仮名や数列の理解から詩の理解までを一つの「理解」という語で呼んでよいのだろうか。言葉の理解は普通に思われているよりも一層、音楽のテーマや詩の理解に似ている、というのが Wittgenstein の見解であった。(PU I-527f.) 即ち、我々は、等しいことを述べる他の文で置換可能であるという意味での(即ち、等しいことを述べる複数の文に共通なものとして「命題」が抽象されるような意味での)文の理解について語るが、他のいかなる文によっても置換不可能という意味での文の理解についても語る。後者の場合、その文はまさに述べられる通りの語と語順によって理解される他はない。(PU I-531) そして我々は日々このことを行っている。即ち、具体的脈絡の中で、語をこの意味で聞き、文をこうフレーズし、こうアクセントをつけ、このように聞く、こうしてはじめてその文は、それ以後の言葉、行為等々への移り行きのはじまりとなる。(PU I-534) そして具体的脈絡で具体的にうけとられた「これらの言葉から、多くのよく知られた (wohlbekannt) 途があらゆる方向へと通じている」(PU I-525, 534) とされるのである。

「意味の指示理論」に対する Wittgenstein の批判はかくも根強いものであった。しかし、この文はこの脈絡でこのように聞かれる他はない、と彼が主張する折に、彼はどこに依拠していたか。「よく知られた」「受容さるべきもの、所与」である「生活諸形式」である。(PU II S. 226) この Wittgenstein の前提について問うことは、彼を超えて問うことであり、稿を改めて論じなければならない問題である¹³⁾。

- 1) 今回もなお、筆者はこの大問題に決着をつけることができなかつた。小論はそのための覚え書きにすぎない。なお『哲学探究』に関する筆者の見解については次の論文をも参照頂ければ幸である。
「ヴィトゲンシュタインとハイデッガー」論序説、理想444, 1970。
私的言語と言語ゲーム、日本哲学会編、『哲学』21、法政大学出版局、1971。
言語ゲームに関する一試論、理想502, 1975。
- 2) G.E.M. Anscombe は Notebooks 1914-1916 の英訳のかかなりの箇所で“Bedeutung”を“reference”と訳している。もとより彼女が註 (p.15e) で断っているように、この訳は“Sinn”と“Bedeutung”に関する Frege の区別を、“sense”と“meaning”ではなく“sense”と“reference”という対にして対比を強調しようとの意図の下になされている。しかし Frege の元来の用法こそ日常の用法を特定の意図の下で術語化したものであることを考えれば、このような訳し分けは、後年の Wittgenstein の自己批判をおおい隠してしまうことにもつながりうるのである。
- 3) 「言語の意味に関する指示理論」の射程に関して論定することは現在の筆者の能力をはるかに超えている。ここではいわば言語哲学的観点から、ごく大まかな見通しと問題点の指摘を与えるに留めざるをえない。即ち、「指示理論」は「話し言葉」よりも「書き言葉」に依拠した発想であり、この考えが言語理論の中で優位を占めるのは、一方では学問が「書き言葉」に依存する度合に、他方では我々の生活の中で「書き言葉」が「話し言葉」に比して優位を占めてくることに、対応しているのである。即ち、
① 話し言葉はそれが話される個別的具体的 context を抜きにしては考えられず、又その場面で消え去る運命にあるのに対し、書き言葉は具体的な場面を超えて時間的、場所的に生き延びる context-free な性格を持つ。(今日の日常生活で口頭で十分なところで文字を使用する時の種々の理由を考えれば、このことは明らかである。)そして context-free な性格を決定的にしたのが「不特定多

数」を相手とすることを可能にした印刷術の実用化・改良である。又、context-free であることの代償として context を「指示」する種々の語彙が書き言葉では用いられる必要がある（日記の日付）。

② 書き言葉が考察の中心を占めるに及び言語論の関心が個々の具体的な context よりも書き言葉のエレメントとしての語と、語の連鎖としての文に集中する。即ち、語に関しては（他の語との連関で）lexicography の観点からそれと同義な他の言語表現を求めることとなり（学問におけるこれの対応物が概念の本質規定としての「定義」）、文に関しても、話し言葉においては同じ表現が実に種々の仕方でも用いられるのに対し、この立場の下では、文の用法の差異はさしあたり語の差異又は語順の差異として考察される。

③ 又、文語が正規の表現として考察の中心を占めるのに対し、口語はいわば派生的な省略形の扱いを受け、そのニュアンスはニュアンスを「指示」する語彙の補いで十分尽される、と考えられる。話し言葉の術としての rhetoric は後に退き、書き言葉の術としての grammar がこれにとって代り、かつ logic にまで純化される。

④ 理論科学としての学問は、Aristoteles, Eukleides 以来、logic に基いて構成された命題の体系であることを理想としている。

⑤ 少くとも近世以降、科学、政治、経済等日常の社会生活の多くの分野で書き言葉の占める比重が決定的となるに至った。

もとより以上は大まかな予想にすぎないし、今後多大の修正を必要とするものである。又、このような現象を既に古代から存在していたことが現在顕著になっただけであると考えるか、それとも近世以前の社会生活全体の中での書き言葉とそれに関連する事柄の占める位置は極く小さなものにすぎず近世以降のそれとの間には一線を画すべきであるとするか、は大きな問題であるがここでは決定しない。

更に、このように考える限り、我々の生活諸形式（「受容さるべきもの、所与であるもの、……それは生活諸形式である」(PU II S. 226)）が現状通りである限り、書き言葉に依拠する「指示理論」は究極的には克服できないのではないかと、との間が生じてくる。

もとよりこう問うことは、ある点では Wittgenstein を超えて問うことである。どの程度まで彼を「歴史主義的」に解釈しようかについては、論ずべき多くのことが残されており、今なお聞いておかねばならない間である。

- 4) 上述の第二の間「……という文は何を述べているか」への回答は、もし大人の日本人に問われたなら「あなたはこの程度の文が本当にわからないのですか」という疑念と驚きが半ば交錯した表明であり、外人に問われた場合は、どのようにわからないかを問いたし懇切に説明することであろうし、子供に対しては又別な具合の反応であろう。いずれにせよ「……という事実」という答は、哲学をしている場合に限られていた。第一の間への種々の反応については拙稿『言語ゲームに関する一試論』の註(8)を参照されたい。この間への現在の回答（実物のコップの指示）も場合によっては適切な回答である。しかし実物のコップを指示することによるやりとりが成功裡になされるためにはどれだけのことが前提されねばならないかこそ『哲学探究』の冒頭の部分が数十節にわたり論述したところであった。又、最も純粋に指示機能を担うと解される固有名詞にしても必ずしもそうではないこと、これも彼が随所で注意を促したことである。PUI-46 前後の“Urelement”をめぐる議論、モーゼの存在をめぐる議論 (PU I-79,87)、人名と表情の密接な結合についての議論 (PU II S. 215) 等を参照されたい。
- 5) 「私が教えようとするのは、明白でないナンセンスから、明白なナンセンスへ移行することである」(PU I-464)。
- 6) この「意味の用法理論」はまぎれもなく「意味の指示理論」への批判として登場するものであるが、「用法理論」が一般的な理論として意図されたか否かについては問題がある。このことは、個々の言語ゲームから出発しつつ、言語を現行の言語ゲームの総計として把握しようとする試みの採否と密接に関連するが、この試みが『青色本・茶色本』の時期はともかく『探究』期には放棄された (vgl. PU I-65) ことと同様、意味の用法「理論」もこの時期には、Kant 風の表現をすれば、統制的には使用されても構成的に使用されることはなかった。もとよりこのことは指示理論の部分的復権を意味する訳ではない。むしろ逆に、意味の「理論」の構築、「意味とは何か」との間が反問され、「日常の言語では『意味』という語はいかに用いられるのか」と反問されるのである。つまり、日常のコミュニケーションが円滑になされる場合、「意味」なる語はほとんど登場する余地がない。これが登場するのはむしろ当事者にとり不明な表現に出会った場合、ある表現の「真意」をいかに説明する必要がある場合、自然と思われる流れに沿っていたら思わぬ袋小路にぶ

- つかった場合、等々である。このことは哲学一般に対する彼の態度にも通じる。即ち、日常言語はそれがあるがままで完全である、我々はただその見かけの形に感わされてナンセンスに陥ることがある、そのナンセンスから言語批判によって脱出せねばならない、そしてこれのみが哲学の課題である、哲学では何も説明はなされず現行の言語ゲームが正しく記述されるのみである (vgl. PU I-96, 98, 109, 116, 124, etc.), とする彼の態度にも通じるのである。
- 7) なお、他我と痛み、に関する筆者の同様な角度からの見解については、拙稿『私的言語と言語ゲーム』を参照されたい。
 - 8) 痛みやゆううつ、興奮が「心的状態」である、といわれる意味では「理解」は心的状態ではない。(PU I S. 59)
 - 9) このように、単なる音を聞くことと対比して文の理解を考える場合によく出てくる一つの単純な回答がある。即ち、音を聞く+解釈=文を理解して聞く、という類のものである。意識に関する事柄を、単なる物理・生理現象へのプラス・アルファとみなしているこの考えも至るところで Wittgenstein が批判するものであった。このように考えれば、例えば反転図形を「……としてみる Sehen als」は、(としてみる) = (みる) + (解釈) となるし、又意志は、(意志) = (私の腕を上げる) - (私の腕が上がる) ということになり、(表情) = (表情をつけて歌を歌う) - (表情をつけずに歌う) となるであろう (PU I-332, 621, II S. 193f.), という訳である。現在の問題に関しては、仮にこの公式を認めるにしても「解釈」とは何か次問題となることを指摘すれば十分であろう。
 - 10) 数列の例で「わかった」とは言ったものの、書き続ける段になってうまくいかない、という場合がある。この時に我々は「理解したと思ったが、間違いだった」と言ったりする。(これについては後でとりあげる。) この場合と真の理解とは生理学的に区別できるであろうか。(vgl. PU I-155) 理解した(と思った)一瞬に限らず数列を書き続ける時点にまで観察を延長すれば、あるいは区別可能かもしれない。ただし今度は発見されたものが実は「緊張からの解放+テスト成功の満足感」ではないか否かの吟味を必要としよう。問題は実は次のことである。理解するに至る場合によく生じる随伴現象としてなら、我々は眼の輝きや一瞬息を呑むこと等を数え上げることができる。しかしこれらはあくまでも理解の随伴現象としか考えられない。発見されたある生理現象を単なる随伴現象ではなく理解の本質的なメルクマールと考えさせるには、語の定義の単なる変更にとどまらない、「理解」という語に関連する我々の生活様式の大きな変更を必要とする、ということである。
 - 11) 断るまでもないが、こう述べたからといって、種々の装置の作成、生理学的アプローチが無価値である、的外れである、と主張するものではない。これらは貴重かつ困難な課題である。「この子供はどうして平仮名を覚えられないのだろう」という嘆きに対して、「(頭が悪いから)」という表現の工学的比喩にはとどまらない) 専門的な情報を含んだ「これこれの欠陥があるから」との回答は当然尊重に価するし、治療や判定にも役立てることができる。しかしこれから「理解とはメカニズムの形成・保持である」と主張することを我々は問題にしているのである。「理解」という語はそのように用いられていないし、又このような考えが理解を説明する訳でもない、というのが我々の主張である。Wittgenstein によれば、矛盾を数学的・論理学的方法で解消するのは数学者の仕事であるのに対し、市民世界における矛盾の位置を見てとるのが哲学の問題である (PU I-125)。又、反転図形等でのアスペクトの交替、「としてみる」について心理学者はその原因に関心を抱くが、哲学者の関心はその概念そのもの、経験諸概念の中でのその位置に向うのである (PU II S. 193)。もとより市民生活といえども万古不易ではなく、時代と共に、科学の進展にも応じて、変るものであることは言うまでもない。
 - 12) 詩の朗読、音楽の理解—これを生理的メカニズムによって伝達することの困難さについては Lectures and Conversations on Aesthetics, Psychology and Religious Belief p.40.を参照されたい。あるいはここでも我々は物理学の対象としての音しか持たない、このことは名演奏にしても余すところなくテープに収められ再生されることからわかる、と反論されるかもしれない。しかし、この問題は何かの変哲もない物理学的に確定される二次元の図形が相互に反転する立体図形とみえることと同じなのである。
 - 13) もとより哲学といえども前提なしにはありえない。そして「生活諸形式」を出発点とし、「言語ゲーム」を方法とすることが、直ちに批判される訳ではない。しかし、彼自身が自らの課題と方法にどれだけ自覚的であり、又どのような対象が彼の考察の中心であったかは、依然問われるべき問題である。そしてこれを問うことは、我々が彼の「アルバム」のスケッチの数を増すことに加わるか、それともその全体的な整理を手がけることにするか、両者のいずれかを選択することでもある。

ON THE CONCEPT OF "UNDERSTAND"
IN LATER WITTGENSTEIN

MASAHIRO OKU

This article is a part of my interpretation of Wittgenstein's "Philosophical Investigations". In the book he made various efforts to correct and overcome the errors in his former thought. In my view the errors sprang from "the reference theory of meaning". This article will make this point clear as to the investigation of "understand" (PI I-138~197, etc.).

"Understand(know, comprehend)", which is one of ordinary well-known words, is used without difficulty. But there are such characteristics as follows: (i) We do not say of everything, "It understands." Only those that have mind (soul, consciousness) can understand. (ii) It is temporal, but these expressions "Have you known English for ten years *continuously*?", "When did you forget(*not find to have forgotten*)the formula?", are perplexing. (iii) "Understand" is not clearly demarcated from "not to understand" by nature.

According to the reference theory, "understand" is a name of an event or situation of consciousness. So, in order to solve the above problems, one has only to observe what happens in consciousness when one understands (knows, comprehends). This theory suggests two strategies; one is to seek a characteristic mental phenomenon for "to understand", and the other is to regard "to understand" as the formation and maintenance of a certain mechanism. Indeed both are with reason, but in the end unsupported.

In the last part this article tries to sketch Wittgensteinians' answer of the problems. Instead of asking "What is 'understand'?", they ask "How do we use 'understand' in our ordinary life?" The answer is as follows: (i) By including these vocabularies (understand, know, etc.), our forms of life have some features. (ii) The uttering "I understand" is the determination of one's attitude rather than the report of one's inner event. Apology, justification, and the report of past inner event are not clearly distinguishable from one another. (iii) The use of "understand" makes a "family".